

一人一人にしっかりと 身につけさせたい国語の力

— 個に応じた指導 —

対談



秋田大学教授
あべ のぼる
阿部 昇



新宿区立西戸山小学校教諭
やすだ きょうこ
安田 恭子

を見ると、例えば、四年生に『伝え合う』という「こと」という教材があるのですが、ここでは「総合的な学習の時間」と関連をもたせて扱う計画が多いんです。しかし、一年間の国語学習を考えると、まず学年の初めの読みの教材で、こんな力をつける。それが七月の教材『白いぼうし』でこのようにアップして、学年最後の『こんぎつね』では、自分の力でこんな学習をすることができるようになるという年間を見通した計画は、まだまだ足りないのが現状だと思います。

阿部 ●それぞれの教材でこういう力をつけたというねらいの把握が甘いと、授業の切れ味がなくなります。

十七年度版教科書はかなり系統性を重視していますが、その特長を十分生かせなくなってしまうですね。例えば、三年生でいえば、説明文として、上巻に『ありの行列』



▲ 三年(上) 26、27ページ

が、下巻には『すがたをかえる大豆』が位置づけられています。『ありの行列』では、説明文の大枠の構成を、問いと答えの関係で掴ませるといねらいがあるんです。

安田 ●確かに、『ありの行列』には、初めの段落に問いが示されていますね。『なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。』と書いてあれば、子どもたちは自分の力で、さらに答えはどこに書いてあるのだろうと探して読んでいくことができるでしょう。このようにして、「あつ、これで、文章の構成がわかるんだ。」と気づくことが大事だと思います。

阿部 ●そのうえで、『すがたをかえる大豆』に進むと、文章を「はじめ」「中」「終わり」というように分けて、もう少し具体的な文章の構成を学習するわけです。先生方にこうし



▲ 三年(下) 22、23ページ

■一年間でどういう力を身につけさせるか

安田 ●今、職員室や研究会ではいろいろな声が出ています。一年生担当の先生は、話がまったく聞けない子どもがいると言います。わたしは四年生なのですが、教室を見ると、少数ですがそれに近い印象の子どもがいます。六年生の先生からは、最後の学年なのに、こんなことをがんばりたい、という声が少なく聞きました。わたしは、少々がっかりしたのですが、多くの先生方は、こうして悩みながら、さまざまな子どもたちとどうつき合っていくか、と考えている最中だと思います。

阿部 ●先生方には、まずこの一年間で、どういう力を系統的に身につけさせるか、を考えていただきたいですね。教科書のこの単元この教材でこういう力を身につけさせようという全体像がある程度はつきりしていると、何をそこで重点的に扱うかが具体的に見えてくるんです。

安田 ●多くの学校では、年度当初に、すべての教科において年間指導計画を立てます。それら

た系統性をご理解いただくと、この教材ではここを絶対に押さえないといけないという焦点化が図りやすくなる。この教材でどんな力をつけるかがはっきりしていれば、授業そのものが変わると思います。

安田 ● やはり先生方が、教科書の一年間の教材を見通すことをしっかりとしておくことが必要です。教室で教科書を開いて、今日はこんな教材だから、さあやるぞ、ではだめなんですね。

■学習と学習のつながりを意識させる■

阿部 ● 十七年度版教科書をご覧になっていただと、説明文を読むときは、どういうところに気をつけると、よりわかりやすく読めるかとか、どこにポイントがあるのか、などがわかりやすく示されていると思います。

安田 ● 教科書が変わるたびに、特に説明文について、今回はなくなったりとか、これは継続であるとかいう声が聞こえてきます。その際、ただ教材の継続・新規だけではなく、この教材で力つけたことを発展させるために、今

■学習と学習のつながりを意識させる■

かにしていくことができるようになる。そうしていくと、子どもも自分たちが学習していることのつながりが見えてくると思うんです。

安田 ● 確かに、そうでしょうね。

阿部 ● 五、六年生になると、教科書では、さらに論理的な文章の構成を学習するように工夫されています。先生方には、六年間の単元や教材を通した筋のようなものを感じ取っていただきたいんです。

安田 ● 子どもたちは、そうしたことがわからないですから、先生方がほかの学年の教科書を見せるなどして、そのつながりを意識させてあげることが必要ですね。

阿部 ● 例えば、六年生の『みんなで生きる町』では、「調べたことを発表し、考えよう。」と投げかけています。ここでは効果的な発表のしかたを学習するのですが、その前段は四年生の教材『伝え合う』ということ』で学習することになっていいます。80ページに、スピーチメモを掲載するなどして、プレゼンテーションの具体的な方法が書いてあるので

度の教科書はどういう教材で教えるのか、という見方ができたら、先生方もずいぶん違うのではないかと思います。

阿部 ● そうですね。

安田 ● 三年生で段落とはどういうことなのか、という指導があって、四年生の『かむ』ことの力』に進むと、段落に関するまた次のステップがあるという構造になっていますよね。こうした点を理解して上手に使っていくと、文章の構成を理解する力がステップアップする仕組みになっています。

阿部 ● 今は、教科書が使い始められたばかりですが、ほんとうは一、二年たつと、四年生の子もたち、「三年生のときに学習したことがあるよね。思い出してごらん。」と言って、前の学習を振り返りながら、次の学習をより豊

すが、そこには

「調べて分かったことの中から、いちばん知らせたいことを選ぶ。」と書かれてあります。うまく発表できる子どもは、これがしっかりとできています。うまくできない子は、こういう箇所にもう一回戻してあげる大切ですね。

安田 ● 自分が今学んでいることが、あそこにつながっているぞという意識は、大事だと思います。しかし、先生がそこですべてを指導してしまつと、今度は、子どもたちに無理が出てくるんです。

阿部 ● それは、どこまでを教えるか、どこまではこの教材の後に取っておくか、ということ意識すると、しっかりと見えてくるはずなんです。それこそ焦点化した指導です。これは、「個に応じた指導」にもかかわることです。



▲ 四年(上) 80、81ページ



▲ 四年(上) 22、23ページ

ここまでは、教室の子ども全員が到達するようにする。そのために、全体への指導は、こういう形で準備する。ただし、それでも到達が難しい子どもたちには、個別の援助を複数準備する。逆に比較的早く到達した子どもたちには、この課題を示すというように焦点化しているからこそ、指導・援助を多様に準備することができるようになるのです。

■子どもたちを具体的に把握しているか

安田 ● 実際は、子どもの力は、三十人いたらほんとうに三十通りなのです。でも、三十通りの指導をすることは難しいでしょう。わたしの場合は、教室が正方形ではなくて、一か所が凹型の箇所があつて話しやすいので、そこを活用しています。一人ではなかなかできない子を、いっしょに学ぼうよと言ってそこに呼んだり、どうしても嚴重に伝えなければいけないと思ったときも、その子呼んで話したりしているんです。

阿部 ● 多くの子が、学習のその部分をまだク

り組ませるのは今だ。」といった判断が的確にできます。ただし、展開が早すぎると学習を保障できないし、逆にあまり丁寧すぎたり元に戻りすぎると、子どもは「そんなのわかっているよ。」という感じになる。

安田 ● 確かに、子どもたちはあまり戻るとつまらないよという感じになりますね。

阿部 ● その判断は、実際には紙一重で難しいものです。しかし、その紙一重を見極めることができるかが、授業の質を決めるのだと思います。そのためにも、先ほどから強調している単元や教材のねらいを具体的に把握していることと、子どもたちを丁寧に見取れているということが、必要になるわけです。

安田 ● 実際に教えるときに、わたしはこの教材でこんな力を身につけさせたい。そこに到達するために、この学習に抵抗なくついてこられる子はこのくらいいる。一方で、かなり難しいと思う子はこのくらいいるだろう。そして、この子とこの子はしんどいと思った

リアできていないならば、全体指導に戻ったほうがいいと思います。しかし、前の学年で、ある程度の指導を受けていて、かなりの子どもができています。しかし、できていない子も何人かいる。そういうときは、個別指導が必要でしょうね。

安田 ● そうした指導の場合、例えば、課題を最初に提示して、それができる子どもたちには、自分だったらどう考えるか、やってもらんと話します。そして、なかなか難しい子には、いっしょに取り組んでいくと、その子なりに力を引き上げることができるのです。

阿部 ● 大切なことは、先生が教室の子どもたちをどれくらい把握しているか。なんとなく把握しているのではなく、もっと具体的に、どの子どもがどの過程のどの部分を理解しているか、理解していないかということだと思っています。先生方がそこを押さえていけば、「この学習にはもっと時間をかけよう。」「もっとグループで確認する時間を取ろう。」「個別の学習の時間を取ろう。」とか、「次の課題に取

ときに、その子たちの力に合わせて指導をしていく。最近では、こうした少人数指導やコース別指導が、各校でかなり行われているんです。それは、その子が決して学習進度が遅れているとか、だめだということではないんです。少人数指導の積み重ねは、むしろよいことだという意識が子どもたちの心の中にある、各々が安心して学ぶことができると思うんです。

■「個に応じた指導」は子どもの反応を予測し、発見し、援助すること

阿部 ● 先生方が、子どもたちをしつかりと把握していれば、教科書もより効果的に活用できるでしょう。例えば『ありの行列』の「学習」に、「はじめの段落には、『問い』がしめされています。どんな『問い』でしょう。」「『問い』の『答え』は、どこに書いてあるでしょう。」「とあります。これを受けて、『問い』と『答え』の部分を見つけていきながら、この説明文の構成を把握していくわけです。



つけるためには、ここまでしか問いかけないほうがいいのか、あえて抽象的な問いのほうがいい、というようにあると思うんです。

阿部 ●全体には全体にふさわしい発問や助言をする。ただし、その助言では理解が難しい子どもについては、もう少しわかりやすい助言を個別にしていく。先生方がそういうポイントをしっかり掴まれていると、授業がよりよいものになるでしょう。

安田 ●今回の教材は、少し無理だな、という子どもがいることが予測できると、最初にここを整理してみようというように、指導を事前に考えることができます。

阿部 ●「個に応じた指導」は、子どもたちの反応を予測し、発見し、援助し、それぞれを力を引き上げることだと思えます。一つの教材でどんな力を身につけ

つまり、子どもたちの姿がふだんから把握できていれば、反応も予測できるんです。例えば、ほとんどの子どもは『問い』は発見できるはずだ。けれども、『答え』ではこのくらいの揺れが出てくるはずだ、といった予測です。当然それに沿った指導・援助の計画や準備ができるようになる。

安田 ●子どもたちの間にバラツキが出る、ということですね。昨年、四年生の担任をしていて、説明文『体を守る仕組み』を学習しましたが、わかる子はこの文章の構成がすぐわかります。そういう子は、『体を守る仕組み』の新聞づくりをしてもらって投げかけると、「皮膚の役目」とか、「熱とは何か」とかいふタイトルをつけて再構成することができると。ところが、さっぱりわからないという子は、わたしといっしょに、26ページの表を手がかりに、自分にひきつけて学習をしていくと、その子なりに満足して進めていきます。ほとんど家で本を読まないし、国語が好きではないという子も、「先生、なみだも微生物を流すと書いてある。」

と話すんです。

阿部 ●なるほど。安田先生は、子どもたちのそうしたバラツキを予測しているからこそ、ああやっぱりなとわかるのでしょうね。予測が外れるときもあるでしょう。この子は意外にできないとか、ついにクリアしたな、という具合に。しかし、その教材で子どもたちにどういう力をつけさせたいのかがはっきりしていれば、そして子どもの把握と予測ができていれば、全体指導の中で各々を評価してあげたり、意図的に指名をしたりして、「個に応じた指導」ができると思うんです。

安田 ●子どもたちは、先生のたったひとりで書く気になったり、読む気になったりするんです。何気ないけれども、根幹にかかわるひと言ってあります。この段階でこういう力を



せたいのか、ということを先生方が意識されていると、今までは教材の表層の部分での予測でしかなかったものが、もっとこういう力をつけさせたいという授業そのものの本質にかかわった予測、発見、指導になると思うんです。

■ノート指導から個に応じた指導を

安田 ●わたしは、子どもたちに国語のノートをすべて保管させているんです。それは、一人の子のノートが十センチほどの厚さになってしまふほどの数なのです。先生、重いよと言われるので、今、四冊目だとして過去の三冊は書棚に入れておきます。そうした古いノートを、いざというときに教室にもってきて、前に学習したところと比べて、今度は前のこのやり方を使ってみたら、というように教えているんです。こうしていくと、子どもたちは少しずつですが、学び方が見えてきます。

阿部 ●そうした指導だと、子どもたちが、高学年になったときに、中学年のころのノート

を見て、ここは問いと答えがずれているよとか、理由の部分が理由になっていないとか、文章の優れた点や不十分な点を見通す力に身をつけるのですね。

安田 ●子どもたちの文章感覚は、だんだん鋭くなります。わたしの意識の中ではふだんから、子どもたちは、だいたいは読めるなどか話せるなどというのがあつて。こうしたノートで繰り返して指導をすると、この子は、こういう漢字は上手に書くけれど、漢字のつくりが細かい字はまだ理解不足だな、というような見取りができます。すると、指導のときに、間違っているということがすぐ掴める。早く掴めれば、その分の対応も早くしてあげられます。

阿部 ●安田先生のような先生は、「個に応じた指導」を、日ごろからしっかりとされているんですね。安田先生のクラスの子どもたちのノートがもつ意味は大きいのです。こういう力をつけていくという教科内容の具体性、そして、こう積み重ねていくという系統性が

と問われたときに、答えにくい教科だと言われている。ノートをよく見返してごらん、こういうことを勉強したよね、と授業の中で振り返ることが大切なのですね。そうすると、より切れ味のある「個に応じた指導」ができるはず。ぜひそのノートを拝見したいです。

安田 ●今度お会いするときに、そのノートをお持ちします。ぜひご覧になってください。切れ味がいい言葉ですね。わたしは、今年は、切れ味のある国語授業に挑もう（笑）。

ないとそういったノート指導はできません。そうした指導の軸がはっきりとあるから、確かな学力を保障する授業が展開できると思うんです。「個に応じた」全体指導も個別指導もさまざまに準備できる。また、さらにそこから子どもたちの多様な考えも引き出せる。それは偶然ではなくて、今までうかがってきたような周到な準備をしているからです。安田先生の何気ない指導の裏には、多くの優れたしかけがありますね。

安田 ●学年の最後になると、ノートがいつぱいに重なることが喜びになるんですね。子どもたちは、ノートに自分の意見を書きまです。それを発表すると、ほかの友達がそれについて考えを言うわけです。そして、それらも書いていく。それは、板書を写したのではなくて、ほんとうのノートなのです。こうしていくと、子どもの考えが記録に残っている、それぞれの子どもたちの反応を予測し、発見し、援助することができまです。

阿部 ●国語は、どう勉強をしたらいいのか

